

夏目漱石

點頭錄



点  
頭  
録



## また正月が来た

また正月が来た。振り返ると過去がまるで夢のように見える。いつの間にかこう年齢を取ったものか不思議なくらいである。

この感じをもう少し強めると、過去は夢としてさえ存在しなくなる。まったくの無になってしまう。実際近ごろの私は時々ただの無として自分の過去を観ずることが

しばしばある。いつぞや上野へ展覧会を見に行つた時、公園の森の下を歩きながら、自分はある目的をもつてさつきから足を運ばせているにもかかわらず、いまだかつてちよつとも動いていないのだと考えたりした。これは耄碌もろろくの結果ではない。宅うちを出て、電車に乗つて、山下で降りて、それから靴くつで大地の上をしかと踏んだという記憶をたしかに有もつたうえの感じなのである。自分はその時終日行ゆいていまだかつて行かずという句がどこかにあるような気がした。そうしてその句の意味はこういう心持を表現したものではなからうかとさえ思った。

これをもつとむずかしい哲学的な言葉でいようと、畢竟ひつぎよう
  
 ずるに過去は一の仮象にすぎないということにもなる。
   
こんごうきよう
 金剛經にある過去心は不可得なりという意義にも通ず
   
 るかも知れない。そうして当来の念々はことごとく刹那せつな
  
 の現在からすぐ過去に流れ込むものであるから、また瞬
   
 刻の現在からなんらの段落なしに未来を生み出すもので
   
 あるから、過去についていい得うべきことは現在について
   
 もいい得べき道理であり、また未来についても下し得べ
   
 き理窟であるとする、一生はついに夢よりも不確実な
   
 ものになってしまわなければならない。

こういふ見地から我われというものを解釈したら、いくら  
 正月が来ても、自分は決して年齢としを取るはずがないので  
 ある。年齢を取るように見えるのは、まったく暦こよみと鏡  
 の仕業しわざで、その暦も鏡も実は無に等しいのである。

驚くべきことは、これと同時に、現在の我が天地を蔽おお  
 ひ尽して儼存げんそんしているという確実な事実である。一挙手  
 一投足の末に至るまでこの「我」が認識しつゝ絶えず過  
 去へ繰越くりこしているという動かしがたい真境である。だか  
 らそこに眼を付つけて自分の後を振り返ると、過去は夢ど  
 ころではない。炳乎へいことして明らかに刻下の我を照しつゝ



ある探照燈のようなものである。したがって正月が来るたびに、自分はやはり世間並に年齢を取って老い朽ちてゆかなければならなくなる。

生活に対するこの二つの見方が、同時にしかも矛盾なしに両存して、普通にいうところの論理を超越している異様な現象について、自分は今なにも説明するつもりはない。また解剖する手腕も有<sup>も</sup>たない。ただ年頭に際して、自分はこの一体二様の見解を抱<sup>いだ</sup>いて、わが全生活を、大正五年の潮流に任せる覚悟をしたまでである。

もし無に即していえば、自分は今度の春を迎える必要

もなにもない。いや明治のはじめから生れないのと同じ  
ようなものである。しかし有になずんでいえば、多病な  
身体からだがまた一年生き延びるにつけて、自分の為なすべきこ  
とはそれだけ量において増すのみならず、質においても  
いくぶんか改良されないとともに限らない。したがって天が  
自分にまた一年の寿命を借してくれたことは、平常から  
時間の欠乏を感じている自分にとって、どのくらいの  
幸福になるか分わからない。自分はできるだけ余命のあらん  
かぎりを最善に利用したいと心掛こころがけている。

趙州和尚じょうしゅうおしょうという有名な唐とうの坊さんは、趙州古仏晩年

発心と人にいわれただけあって、六十一になってから初めて道に志した奇特な心懸こころがけの人である。七歳の童児なりとも、我に勝るまさものには我れすなわち彼に問わん、百歳の老翁なりとも我に及ばざる者には我れすなわち侘だを教えんといつて、南泉という禅坊さんのところへ行つて二十年間倦うまずに修業を継続したのだから、卒業した時にはもう八十になってしまったのである。それから趙州の観音院に移つて、はじめて人を得度とくどしだした。そうして百二十の高齡に至るまで化導けどうをもつぱらにした。

寿命は自分の極きめるものでないから、もとより予測は

できない。自分は多病だけれども、趙州の初発心しよほつしんの時よ  
 りもまだ十年も若い。たとい百二十まで生きないにして  
 も、力の続くあいだ、努力すればまだ少しはなにかでき  
 るように思う。それで私は天寿の許すかぎり趙州の顰ひそみ  
 にならって奮励こころぐみする心組こころぐみでいる。古仏といわれた人の  
 真似まねも長命も、むろん自分の分でないかもしれないけれ  
 ども、羸るいじやく弱じやくなら羸弱るいじやくなりに、現にわが眼前に開展する  
 月日に対して、あらゆる意味においての感謝の意を致いたし  
 て、自己の天分のありたけを尽そうと思うのである。自  
 分は点頭録の最初にこれだけのことをいっておかないと

気が済まなくなつた。

## 軍国主義

### 一

今度の欧州戦争が爆発した当時、自分はある人から突然質問を掛けられた。

「どんな影響が出てくるでしょう」

「さよう」

自分は実際考える暇を有<sup>も</sup>たなかつた。けれども答えなければならなかつた。

「どんな影響が出てくるか、来てみなければむろん解<sup>わか</sup>りませんけれども、なにしろ吾<sup>われわれ</sup>々がこれはおどろくような目覚<sup>めざ</sup>ましい結果は予期しにくいように思います。元来事の起りが宗教にも道義にも、ないし、一般人類に共通な深い根柢を有した思想なり感情なり欲求なりに動かされたいものでない以上、どちらが勝ったところで、善が栄えるところというわけでもなし、またどちらが負けたにしたとこ

ろで、真が勢いきおいを失うということにもならず、美が輝かがやきを減ずるといふ羽目はめにも陥る危険はないじやありませんか」

自分はそう言い切ってしまった。そうして戦争の展開する場面が非常に広い割に、またそれに要する破壊的動力が凄すさまじいくらい猛烈な割に、案外落付おちついていられるのは、まったくこの見解が知らず知らず胸の裡うちにあるからだろうと、ひそかに自分で自分を判断した。

実際この戦争から人間の信仰に革命を引き起すような結果は出てこようとも思われない。また従来の倫理観を

一変するような段落が生じようとも考えられない。これがために美醜の標準に狂いが出ようとはなおさら懸念けねんできない。どの方面から見ても、吾々の精神生活が急劇な変化を受けて、いわゆる文明なるものの本流に、強い角度の方向転換が行われる虞おそれはないのである。

戦争と名のつくものの多くは古来からたいていこんなものかもしれないが、ことに今度の戦争は、その仕懸しかけの空前おおげさに大袈裟おおげさなだけに、ややともすると深みの足りない裏面を対照としてかえって思い出させるだけである。自分どくガスは常にあの弾丸とあの硝薬とあの毒瓦斯どくガスとそれからあ



の肉団と鮮血とが、我々人類の未来の運命に、どのくらい  
の貢献をしているのだろうかと考える。そうしてある  
時は気の毒になる。ある時は悲しくなる。またある時は  
馬鹿々々しくなる。最後におりおりは滑稽こっけいさえ感ずる場  
合もあるという残酷な事実を白白せざるを得ない。そう  
した立場から眺ながめると、いかに凄じい光景でも、いかに腥なま  
ぐさい舞台でも、それに相応した内面的背景を具そなえてい  
ないという点において、またそれに比例した強硬な脊髄  
を有していないという意味において、浅薄な活動写真だ  
の軽浮なセンセーショナル小説だのと扱えらぶところがない

ような氣になる。たとい殺傷に参加する人々個々の頭上には、千差万別の悲劇が錯綜紛糾さくそうふんきうして、時々刻々に彼等の運命を變化しつつあるうとも、それは当座かぎりの影響にすぎない。永久に吾人一般の内面生活を変色させるような強い結果はどこからも生れてこない。とすると、今度の戦争は有史以来特筆大書すべき深刻な事実であるとともに、まことに根の張らない見掛倒しの空々しい事実なのである。

## 二

しかしもう少し低い見地に立って、もつと手近なところを眺めると、この戦争の当然将来に齎すべき結果は、いくらでも吾々の視線の中にはいつてこなければならぬ。政治上にせよ、経済上にせよ、向後解決されべき諸問題はどのくらい彼等の前に横わっているか分からないといつても好いくらいである。

そのなかで事件の当初から最も自分の興味を惹いたも

の、また現に惹きつつあるものは、軍国主義の未来という問題にほかならなかつた。人道のための争いとも、信仰の為の闘たたかいとも、また意義ある文明のための衝突とも見做みなすことのできないこの砲火の響ひびきを、自分はただ軍国主義の発現として考えるよりほかに翻訳のしようがなかつたからである。欧州大乱という複雑きわ極まる混乱した現象を、こう驚攫わしづかみに纏まとめて観察した時、自分ははじめてこの戦争にある意味を付着することができた。そうしておもにその意味からばかり勝敗の成行なりゆきを眺めるようになった。したがって個人としての同情や反感を度外に

置くと、ドイツだのフランスだのイギリスだのという国名は、自分にとつてもう重要な言葉ことばでもなんでもなくなつてしまった。自分は軍国主義をひょうぼう標榜するドイツが、どのくらいの程度において連合国を打ち破り得るうか、またどれほど根強くそれらに抵抗し得るかを興味に充みちた眼で見詰みめるよりは、はるかにより鋭い神経を働かせつゝ、ドイツによつて代表された軍国主義が、多年英仏において培養された個人の自由を破壊し去るだらうかを観望しているのである。国土や領域やラテン民族やチュートン人種やすべて具象的な事項は、今の自分にさした問

題になつていない。

ドイツは当初の予期に反してすこぶる強い。連合軍に對してこれほど持ち<sup>こた</sup>応えようとは誰しも思つていなかったくらいに強い。すると勝負のうえにおいて、いわゆる軍国主義なるものの価値は、もうだいたい世界各国に認められたといわなければならぬ。そうして向後ドイツが成功を収めれば収めるほど、この価値は漸漸高まるだけである。イギリスのように個人の自由を重んずる国が、強制徴兵案を議会に提出するのみならず、それが百五對四百三の大多数をもつて第一讀会を通過したのを見て

も、その消息はよく窺うかがわれるだろう。

かつてギツシングの書いたものを読んだら、小さいうち学校で体操を強しいられるのが、非常の苦痛と不快を彼に与えたということが精くわしく述べてあった末に、もしわが英国で本人の意思に逆さからってまでも徴兵を強制するようになったと仮定したら、自分はどんな心持になるだろう、そういう事実は万々起るはずはないのだけれども、ただ想像して見てさえ堪たえられないと付け加えてあった。ギツシングのような独居を好む人は特別だというかもしれないが、英国人の自由を愛する念といたら、ほ

とんど第二の天性として一般に行き渡っているのだから、強制徴兵に対する嫌悪の情は、誰しもギツシニングに譲らないとみても間違まちがいはないのである。その英国でむりにも国民を兵籍に入れようとするのには至大の困難があると思わなければならぬ。その困難を冒して新しい議案が持ち出され、またその議案が過半の多数によって通過されたとすると、現に非常な変化が英国民の頭の中に起りつつある証拠になる。そうしてこの変化はすでにドイツが真向まっこうに振り翳かざしている軍国主義の勝利と見るよりほかに仕方しかたがない。戦争がまだ片付かたづかないうちに、英国



は精神的にもうドイツに負けたと評しても好いくらいのものである。

## 三

開戦の劈頭へきとうから首都パリを脅おびやかさされようとしたフランスの脳裏には英国民よりもはるかに深くこの軍国主義の影響が刻み付けられたに違ちがない。ただでさえどうしてドイツに復讐ふくしゅうしてやろうかと考え続けに考えてきた彼等が、いよいよよとなると、かえってそのドイツのため

に領土の一部分を蹂躪じゆうりんされるばかりか、政庁さえ遠い所へ移さなければならなくなったのは、彼等にとってはなはだ痛ましい事実である。その事実を眼前に見た彼等の精神に、一種の強い感銘が起るのもまた必然の結果といわなければなるまい。飛行船から投下された爆弾以外に、まだ寸土も敵兵に踏まれていない英国に比較すると、この精神的打撃はさらに幾倍の深刻さを加えているとみるのがまさに妥当の見解である。

不幸にして強制徴兵案のように自分の想像を事実のうえで直接確たしかめてくれるほどの鮮あざやかな現象が、フラン

スではまだ起っていないから、自分は自分の臆説おくせつをそう  
 手際てぎわよく実際に証明するわけに行かない。けれども戦争  
 の経過につれて、彼等の公表する思想なり言説なりに現あらわ  
 れてくる変化を迹付あとづければ、自分の考えのたいして正鵠せいこく  
 を失っていないことだけはほぼたしかなように思われ  
 る。このあいだある雑誌で「力」という観念について独  
 仏両者を比較したパラントという人の文章を読んだ時、  
 自分はますますその感を深くした。

彼は「力」という考えのなかに、ドイツ人の混入した  
 不純な概念を列挙した末、フランスのそれもやはり変に

歪ゆがんでしまったという事を下のように説いている。

『フランスでは科学的にいわゆる「力」というものが正義権利の観念と衝突した。ルーテル式ドイツ式ではないが、ルソー式、トルストイ式、四海同胞式、平和式、平等式、人道式なるこの観念のために本来の「力」という考えがつい曲げられて、不徳不仁の属性を帯びるようになってしまった。そこで正義と人道と平和のためにこの「力」というものを軽蔑けいべつしかつ否定しなければならなくなった。そうして美と正義を一致させ、美と調和を一致させる美学を建設した。奮闘も差別も自然の法則である

ということを忘れた。美そのもとも一種の「力」であり、また「力」の発現であるということも忘れた。正義そのものも本来の意味からいえば平衡を得た「力」にすぎないということも忘れた。「力」のほうが原始的で、正義のほうはかえって転来的であるということも忘れた。こんな僻見へきけんに比べるとニーチエのほうがどのくらいもつともであったかわか分らない。……そこで吾吾はどうしても「力」という観念をここで一新する必要がある。そうしてほんとうの意味でもう一度それを評価の階段中に入れ易かえなければならぬ。自然の法則を現すという点にお

いて「力」は科学的なものである。勝利を冀ねがう人間の精神を現すという点において「力」は高尚こうしようなものである。吾々はもう権利と「力」とを対立させることを已やめなければいけない。権利がなくなつて負けるのはまだしもだが、権利があるうえに負けるのは二重の敗北である。最大の損害である。無上の不幸である』

じょうまん冗漫と難澁とを恐れて、わざと大意だけを抄訳したこの一節を読んでみても、相手の軍国主義がどんな風わかにフランスの思想界の一部に食い入りつつあるかが解わかるだろう。

## 四

すると戦争のまだ落着しないうちから、年来ドイツによつて標<sup>ひょう</sup>榜<sup>ぼう</sup>された軍国的精神なるものはすでに敵国を動かしはじめたのである。遠い東の果<sup>はて</sup>に住んでいる吾々<sup>われわれ</sup>の視聴を刺戟するくらい強く彼等<sup>ら</sup>の心を動かしはじめたのである。そうしてこの影響はたとい今度の戦争が片付<sup>かたづ</sup>いても、容易に彼等の脳裏から拭<sup>ぬぐ</sup>い去ることができないのである。単に過去の経験を痛切に記憶すべく余儀<sup>よぎ</sup>なく

された結果として拭い去ることができないばかりでなく、未来に対する配慮からしてもとうていこの影響を超越するわけにはゆかないのである。

待対世界の凡てのものがことごとく条件つきでその存在を許されている以上、向後に回復されべき欧州の平和にも、また絶対の權威が伴っていないことだけは誰の眼だれにも明あきらかである。しかし彼等がその平和の必要条件として、それとはまったく両立しがたい腕力の二字を常に念頭に置くべく強しいられるにいたっては、彼等といえどもいまさらながら天のアイロニーに驚かざるを得まい。



現代にいわゆる列強の平和とはつまり腕力の平均にほかならないという平凡な理窟を彼等はまた新しく天から教えられたのである。土俵の真中まんなかで四つに組んで動かない力士は、外観上しごく平和そうに見える。今まd彼等の享きょうゆう有した平和も、実はそれほどに高価で、またそれほどに苦痛性を帯びていたのである。しかも彼等は相撲取すもうとりのようにそれを自覚していなかつたために突然罰せられた。換言すれば生存上腕力の必要を向後当分のあいだ忘れる事のできないように遣付やっつけられた。軍国主義が今まで彼等に及ぼした、またこれからさき彼等に及ぼすべき

影響は決して浅いものではない。また短いものではなからう。

プロシア人は文明の敵だと叫んで見たり、ドイツが傍そばにいると食った物が消化こなれないで困るといったりしたニ―チエは、偉大なる「力」の主張者であつた。不思議にも彼の力説した議論の一面を、彼の最も忌み悪にくんだドイツ人が、今政治的にまた国際的に、実行しているのである。そうして成効しているのである。軍国主義の精神には一時的以上の真理がどこかに伏在していると認めても差さしつかえ支さないかもしれない。

しかし自分の軍国主義に対する興味は、ここまで観察してくるとそこで消えてしまわなければならない。自分  
はこれ以上同じ問題について考える必要を認めない。ま  
た手数も厭いとわしい気がする。自分はもっと高い場所に上のぼ  
りたくなる。もっと広い眼界から人間を眺めたくなる。  
そうして今ドイツを縦横にかつ獰どうもう猛に活躍させているこ  
の軍国主義なるものを、もっと遠距離から、もっと小さ  
く観察したい。

将来における人間の生存上赤裸々なる腕力の発現が、  
大仕掛おおじかけの準備、すなわち戦争という形式をもって世の中

に起るとすれば、それを解釈するものは、腕力の発現そのものが目的で人間が戦争をするのであるとするか、または目的は他にあるが、それを遂行する手段として已<sup>やむ</sup>を得ず戦争に訴えたのだとしなければならぬ。しかし戦争そのものが面白<sup>おもしろ</sup>くって戦争をしたものが昔からあるだろうか。ナポレオンのようなこの方面の天才ですら、夜打朝懸<sup>ようちあさがけ</sup>、軍さの懸引<sup>いく</sup>に興味<sup>かけひき</sup>は有<sup>も</sup>っていただけかもしれないが、ただ戦いたいから戦ったのだとは受け取れない。たとい露骨な腕<sup>わんりよくざ</sup>力沙汰<sup>た</sup>が個人の本能だとしても、相手を殺したり傷<sup>きず</sup>けたりしない程度においてその本能を満足

させるのが人情である。一日に何千何万という人命を賭かけにしてこの本能に飽満の悦楽を与えるのが戦争であると、誰だれしも言い得まい。すると戦争は戦争のための戦争ではなくって、他になんらかの目的がなくてはならない、畢竟ひっきょうずるに一ひとつの手段にすぎないということに帰着してしまふ。

いずれの方面から見ても手段は目的以下のものである。人間の目的が平和にありとも、芸術にありとも、信仰にありとも、知識にありとも、それを今批判する余裕はないが、とに

かく戦争が手段である以上、人間の目的でない以上、それに成効の実力を付与する軍国主義なるものもまた決して活力評価表のうえにおいて、決して上位を占むべきものでないことは明<sup>あきら</sup>かである。

自分はドイツによつて今日まで鼓吹された軍国的精神が、その敵国たる英仏に多大の影響を与えたことを優に認めると同時に、この時代錯誤的精神が、自由と平和を愛する彼等にかくの多大の影響を与えたことを悲しむものである。

## トライチケ

## 一

欧州戦争が起ってから、ドイツの学者思想家の言論を  
実際に解釈するものが続々出て来た。

最初イギリスの雑誌にはニーチエなまえという名前がしきりに見えた。ニーチエは今度の事件が起る十年もまえ、すでに英語に翻訳されている。イギリスの思想界にあって

別に新らしい名前あたでもない。しかし彼等らはその名前に特別な新らしい意味を着けた。そうして彼の思想をこの大戦争の影響者であるごとくにいいだした。これは誰だれの眼にも映るほどしばしば繰り返された。基督キリストの道徳は奴隷の道徳であると罵ののしつたのはまさにニーチエであると同時に、ビスマークを憎みトライチケを侮つたのもニーチエであるとする、彼がこういう解釈を受けて満足するかどうかは疑問である。本人の思わくいかんは別問題として、彼の唱道した超人主義の哲学が、この際ドイツにとって、どれほど役に立っているかも遠方に生れた自分



にはほとんど見当が付かない。

フランスの一批評家は「いわゆるドイツ的發展」という題目の下に、もとヘーゲルとビスマルクとウイリアム二世の名を列挙した。彼はヘーゲルのような純粹の哲学者を軍人政治家と結び付けるばかりか、その思想が彼等軍人政治家の実行に深い關係を有しているのだということの説明しようとして試みた。彼のいうところによると、プロシアの軍国主義はヘーゲルの觀念論の結果にほかならんとするのである。——元來ドイツのアイディアリズムは觀念の科学であつて、その觀念なるものがまた大いに感情

的分子を含んでいる。文字の示現どおり単なる冥想めいそうや思索でなくって、場合が許すならば、いつでも実行的に変化するのみならず、時としては侵略的にさえなりかねないほど毒々しいものである。アイディアリズムが論議の援助を受けて、主観客観の一致を発見したが最後、ここに外界と内界の墻壁しょうへきを破壊して、すべてを吸収し尽さなければ已やまないことになる。アイディアリズムから思おも寄らない物質主義が現われてくる。これは最初から無関心で出立しない哲学として、陥るべき当然の結果である。

この批評家のいうことが、はたして真相の解釈であるかどうか、これも自分には分わからない。ただ遠くにいて、その土地の空気を呼吸しないせいか、こういう説明は自分から見ても切実でないような気がする。奇き抜ぼつなことは突とつ飛びなくらい奇抜とは思うが、それがためかえってなるほどと首肯しがたくなるくらいなものである。

例を挙あげればまだたくさんあるが、そう一々も覚えていないから、まずこのくらいにしておいて、自分はちよつとこういう現象についてここに插そう話わて的きながら考えてみたいと思うことがある。

英仏の評論家は現在の戦争を単に当面の事実としてばかり眺めていないのみならず、またそれを政治上の問題としてばかり考えていないのみならず、その背後に必ずある思想家なり学者なりの言説を大いなる因子として数えたがっている傾向にみえる。実際欧州の思想家や学者はそれほど実社会を動かしているのだろうか。

自分は日露戦争が、わが日本の生んだ大哲学者の影響を蒙こうむって発現したとは決して思わない。日清戦争もそのとおりである。戦争はとにかく、その他の小事件にせよ、わが日本に起った歴史的事実の背景に、思想家の思

想を基点として据え得るものはほとんどないよう  
に思う。現代の日本にあつて政治はあくまでも政治である。  
思想はまたどこまでも思想である。二つのものは同じ社  
会にあつて、てんでんばらばらに孤立している。そうし  
て相互のあいだになんらの理解も交渉もない。たまに両  
者の連鎖を見出すかと思つと、それは発売禁止の形式に  
おいて起る抑圧的なものばかりである。山陽の日本外史  
が維新の大業に醜酵分となつて交り込んだのは、例外中  
の例外で、しかもそれは明治大正以前の事実にすぎない。  
日本の思想家が貧弱なのだろうか。日本の政治家の眼界

が狭いのだらうか。または西洋の批評家の解釈に誇張が多すぎるのだらうか。自分は三つとも否定するわけにくまいと思う。そうしてそのうちで西洋の批評家の誇張がいちばん少ないように思う。

## 二

もしトライチケの名がニーチエやヘーゲルと同じ意味ひきあいにおいてこの戦争の引合に出るならば、自分は少なくともこれだけのことを頭のうちに入れておくほうが便利だ

と考える。そうすればたいした困難と誤解なしに、現下ドイツにおける彼の地位が、比較的明瞭めいりように想像され得るからである。

ニーチエやヘーゲルはこの事件後に復活した名前なまえではない。ただ在来の名前に英仏人が新らしい意義を付けただけである。疾とうから知れている彼等らの内容を、一種の刺激に充みちた異様の目で、特別に眺ながめただけである。トライチケも復活した名でないかもしれない。けれども前者と違って、この際新らしい解釈を受ける必要のない名である。今までのトライチケを今までどおりに見ていれ

ば、視線の角度を改める必要も手数も要らないで、すぐ彼と今度の戦争との関係が解わかるのである。彼の説はニ―チエほど高踏的でなかった。孤峰頂上から下界へ向むかって命令するがごとき態度で、詩のような哲学、また哲学のような詩を絶叫しはしなかった。むろんヘーゲルほど神秘の雲のうちに隠れて弁証いなずまの稲妻もろてを双手ろうに弄する人ではなかった。彼は最初から確実に地上を歩いていた。のみならず彼の眼界は狭いドイツによつて東西南北ともに仕切しきられていた。したがっていまさら新しく彼を翻訳する必要もなければまたしようとしたところでその余地も



ないのである。ただ当時の彼を当時のまま引き延ばして、今の戦争に連続させさえすれば、それで両者の関係はかなり判然するのである。自分はわざと両者の関係といた。実は彼が今次の大戦争に及ぼした影響といたいのであるが、それはニーチエやヘーゲルの場合と同じく、影響の程度からいって、自分にはよく解わからないから、仕方なしにそういう言葉遣いことばづかを遠慮した。しかもそのうえに前述べたとおり、彼我国情の差違ならびに批評家の誇張などを念頭に置いて、これからトライチケを一瞥いちべつしようとするのである。

千八百三十四年ドレスデンに生れた彼は、父が軍籍にあつた関係からいつても、母が士官の娘であつた因縁から見ても、兵士たるべき運命を有<sup>も</sup>つて生れたと同じことであつた。小供<sup>こども</sup>の時、疱瘡<sup>ほうそう</sup>に罹<sup>か</sup>つたのと、それに引き続いて耳の病気に冒されたので、幸か不幸か、彼は彼の既定の行路を全然見捨てなければならなくなつた。

しかし十四くらいから彼の父に送る手紙のなかには、もう政治上の意見などがちらほら散見しはじめたそうである。そうして十六になるかならないうちに、彼はいつのまにか熱烈なるドイツ統一論者になつてしまつた。む

ろんプロシアを盟主としなければならぬというのが、彼の当初からの主張であつた。彼がライプツヒに遊学したころ、教授の講義はろくに聴ききもせず、手て当り次第あたに一人ひとりぼっちの乱読を恣ほしいままにした時ですら、書物から得う得るすべての知識は、みなこのプロシア中心の国家という大理想を構成するために利用されたのである。

彼はマキアヴェルを読んだ。正義だろうが道德だろうが、国家のためならば、いつ犠牲に供しても差さしつかえ支ないものだという信念を抱いだくようになった。専政だろうが压制だろうが、いやしくも国家の統一を維持し、また国家

の威力を増進する以上は、いくらどう用いても構わないものだという決論に到着した。そうしてその意見を彼の父に書いてやった。これは彼がゲツチンゲンで修業しているところで、年齒としにすると二十二三の時のことである。

## 三

東西南北どちらの方角を眺ながめても、彼の目に映うつるものはことごとくドイツの敵であった。彼はロシアを軽蔑けいべつした。年来ドイツの統一に反対するオーストリアも、彼

の憎悪を免まぬかれなかつた。ミルトンとシエクスピヤを嘆  
美しながらも、それらの詩人を有するイギリスは、彼か  
ら見るとドイツの発展に妨害ある一種の邪魔物じやまものにすぎな  
かつた。彼はとうてい一戦争しなければ済すまないと考え  
た。そうしてその戦争から真に強固にして健全なドイツ  
が生れてくるということを信じて疑わなかつた。

多数の聴講生を有する彼は、この目的をもつて大学で  
普国史を講じだした。ごたごたした小邦はみんな取り潰つぶ  
してしまわなければならぬという彼の本意は、この一  
事でも窺うかがわれた。彼はみずから小邦に生れたことを忘

れた。彼の父に対する義理も忘れた。彼は父に向つて言  
つた。

「親子の情合じょうあいのために自分の信念を枉まげることとは、私  
にはづうしてもできません」

彼はこの言葉ことばとともにライプチツヒを去った。再び招  
かれてそこで演説を試みた時、彼はドイツ統一のために、  
炎のような熱烈の言辞を二万の聴衆の上に浴あびせ掛かけた。  
無邪気な彼等らは呆然ぼうぜんとして驚おどろいた。

ところへビスマークが現われた。そうしてビスマーク  
は彼の要する理想の人物であった。ビスマークの時めく

プロシア政府はなおのこと統一の中心にならねばならなかった。彼のいわゆる「国家」とならねばならなかった。

「第一に自由、それから統一」という叫び声を無意味なものとして聞き流した彼は、「第一に国家の権利、それから国家」という旗幟はたじろしを無遠慮に押し立てた。そうしてその国家はすなわちプロシアである。他の小邦は幾多の犠牲を甘んじて、この中央政府の意志と命令に従わなければならぬというのが彼の意見であった。

「国家の実質とも見倣みなし得うべき「力」を有たない小邦が、なんで国家を代表することができよう」

彼はこういって、多くの小邦を睥睨へいげいした。そのうちには彼の故郷のサクソニーもむろん含まれていた。

千八百六十七年ビスマークの力によつて成就された北ドイツの連合は、この意味からみて、彼の理想をある程度まで現実にしたものに違ちがひなかつた。その結果としてすべてに課せられたる義務兵役と、その義務兵役から生ずる驚ろくべき多くの軍隊とは、支配権を有するプロシアにとつて大いなる力であつた。それをドイツ勢力の増進に必要な条件、すなわち西方発展策に応用したのがすなわちプロシア戦争なのである。



彼の教授を受けた多くの学生はその時従軍した。彼等ひとりの一人が熱烈な告別の辞を述べた時、「どんな犠牲を払っても勝て」と言った彼は、たちまちヒーローとして青年から目されるようになった。彼はもとよりドイツの勝利を信じて疑わなかったのである。そうして不思議の沈黙に陥ったかと思うと、彼は負けたフランスに課すべき条件の項目をそのあいだに調べだした。彼はアルサス・ローレンの歴史を研究した末、この二州はもともとドイツのものであったのだから、戦勝後は当然旧主の手に帰すべきものだという説を発表した。

## 四

ドイツは勝った。ドイツ帝国は成立した。彼が十年の間夢にまで見た希望はついに達せられた。

「統一の星は上った。その途を妨ぐるものは災を蒙れ」

これが彼の言葉であつた。この光輝ある時期に際会しながら、なおかつ厭世哲学を説くハルトマンのごときは畢竟ずるに一種の精神病者にすぎないと彼は断言した。

そのくせ意志の肯定は国家として第一の義務であると主張する彼は、ハルトマンによって復活されたる意志の哲学、すなわち宇宙実在の中心点を意志の上に置く哲学によって大いに動かされたのである。彼は実社界をしごく手荒いものに考えた。仁義博愛は口にいうべくして政治上に行うべきものでないと信じた。かくして彼はあらゆる人道的および自由主義の運動に反対したのである。……

自分はトライチケの影響で今度の欧州戦争が起ったとはいわない。彼の生時にあってすら、彼はビスマークの

顧問でもなければまた助言者でもなかった。彼の主張とビスマークの実行とはむしろ偶然に一致したのだらう。たとい彼が鉄血宰相の謳歌者であつたに<sup>おうかしや</sup>したところで、謳歌されるビスマークのほうでは、それほど彼の言論に動かされていなかつたかもしれぬ。それにもかかわらず結果からいえば、彼はビスマークの政治上で断行したことを、彼の学説と言論によつて一々裏書した<sup>うらがき</sup>といつても差支<sup>さしつかえ</sup>ないのである。そうして今日のドイツが、社会主義者その他の反抗に閑せず、当時の方針をそのまま継続して、その極今度の大乱を引き起したとすれば、思想

家としてトライチケのドイツに對する立場もまたしぜん  
めいりよう明瞭めいりようになつたわけである。

これだけの關係を明あきかにすると、自分の癖として、  
 また根本問題に立ち返つて、質問が起したくなる。

「トライチケの鼓吹した軍国主義、国家主義は畢竟ドイ  
 ツ統一のためではないか。その統一は四圍の圧迫を防ぐ  
 ためではないか。すでに統一が成立し、帝国が成立し、  
 侵略の虞おそれなくしてドイツが優に存在し得たあかつきに  
 は撤回すべき性質のものではないか。もし永久にこの主  
 義で押し通すとならば、論理上この主義そのものに価値

がなくってはならない。そうしてその価値によってこの主義の存在が保証されなければならぬ。そんな価値がはたしてどこから出てくるだらうか」

個人の場合でもただ喧嘩けんかに強いのは自慢にならない。いたずらに他ひとを傷あやめるだけである。国と国とも同じことで、単に勝つ見込があるからといって、みだりに干戈かんかを動かされては近所が迷惑するだけである。文明を破壊する以外になんの効果もない。勝ったものは勝った後あとで、その損害を償う以上の貢献を、大きな文明に対してしなければならぬはずである。少なくともその心掛こころがけがな

くてはならないはずである。自分は今のドイツにそれだけのことを仕<sup>し</sup>おおせる精神と実力があるかどうかを危<sup>あや</sup>ぶまざるを得ないのである。

するとトライチケの主張はドイツ統一前には生存上有効でもあり必要でもあり合理的でもあって、今のドイツには無効で不必要で不合理なものかも知れないということに帰着する。

しかしながら彼は云った。——

「ウイリアム帝はドイツに祖国を与えたるのみならず、より平衡を得たるまたより合理的なる支配の下に文明世

界を置いた。全世界を健全にするはドイツの事業なりと  
いった詩人ガイベルの言葉は今に実現せられるだろう」  
してみるとトライチケは、ドイツが全欧のみならず、  
全世界を征服するまで、この軍国主義国家主義で押し通  
すつもりだったかもしれない。しかしながら、我々人類  
がことごとくドイツに征服された時、我々はその報酬と  
してドイツからはたしてなにを給与されるのだらう。ド  
イツもトライチケもまずそこから説明してかからなけれ  
ばならない。







日本文学電子図書館

---

点頭録

著者 夏目漱石  
制作者 宮澤一郎  
底本 「漱石全集 第12巻」角川書店  
昭和41年4月20日5版発行

---

日本文学電子図書館